

## 先頭に立つ人間として

新潟県糸魚川市立糸魚川中学校

三年 岡澤 李音

「もうどうしたらいいか分からない」

これは私の胸の奥にいつもある言葉だ。

私は今、二つのリーダーを任されている。生徒会長と吹奏楽部の部長だ。全校生徒四四五名、そして吹奏楽部員、四十一名という大人数の先頭に立っている。そんな私は、日々のリーダー経験を重ねていく上で、「リーダー」というもののあるべき姿が一体どのようなものなのか疑問に思っている。

六月も終わり私たち吹奏楽部は、一カ月後に控えているコンクール地区大会に向けて練習を進めている。本番が近づくとつれて、緊張感と団結力を高めていきたいのだが、なかなかうまくいかない。「西関東大会出場」という高い目標に、熱が入りやる気満々の人、「もう無理だ」と思い、練習を怠る人、そして休部や退部する人が三人も出てしまった。

私が部長に就任した昨年十一月から八カ月間、私のできたことは間違っていたのではないか。もっと違うやり方があったのではないかと自分を悔やむようになった。

この世の中には「リーダーは嫌われ者だ」という言葉がある。私はこの言葉とは反対に「リーダーは一番好かれていることが大切だ。そして、好かれて

いないとリーダーが求めたことに誰も応じてくれない」と考えていたのだ。また、リーダーが強く怒鳴ったり、きつい言葉をぶついたりしたとしても、集団は「リーダーに怒られるから頑張る」という変な意識に変わり、その人自身の成長にはつながらないと考えていた。だが、その考えが間違っていたのだ、ここにきて知り、後悔で胸がいっぱいだ。

この吹奏楽部の現状をつくったのは、私の間違っただけでリーダーシップのせいであつたのだ。大会に近づく二カ月間、このままのゆるさに焦り、厳しくきつい伝え方になってしまっている。一番上に立つ者が焦りや感情を出すと、集団全員が心配になり、安心して練習できないことは分かっている。だが今の私には、これ以上部活が緩まないように厳しくきつく伝えることしかできなかったのだ。

このような経験をふまえ、リーダーとしてのあるべき姿がやっと分かったような気がした。「リーダーは嫌われ者」であるべきだ。だが、嫌われていいのは「厳しさ」だけである。リーダーという権限を使わず、部員と対等に接し、同じように働く「思いやり」「人情」を兼ね備えることで尊敬をプラスしてもらえるはずだと考えた。集団で何かをやりとげた時、リーダーとしてなすべきことは、目標に向かう道筋をしつかりと立て、信念を貫くこと。その道筋から誰も外れないように厳しく。そして温かく先導していくことではないだろうか。

この世の中には、明るさでリードする人、圧力でリードする人、褒めて伸ばすタイプ、常に叱咤激励で後押しするタイプ、様々なやり方があるのだろう。だが、私はただ一つだけ、「集団に求めることは、自分が一番先にやってみせること」を大切にしている。きつとこれがリーダーのあるべき姿なのだろう。そして、二カ月経った今、新潟県大会が終わった。

結果は金賞ゴールド。なんと新潟県代表になることができたのだ。正直信じられなかった。私たちが今までやってきたことに自信がなかったが、この結果を残すことができたので、間違いでなかったと思うことができた。本当に嬉しい。

この三年間、様々な先輩を見てきた。どんなやり方が正しいのかなんて、まだ分からない。でも、あれだけ悩んだ月日が報われた気がする。県大会が終わった今、「苦しかったエピソードを一つ教えろ」と言われたら、私は答えられないだろう。なぜなら、思い浮かばないからである。確かに、苦しかったこと、悩んだことはたくさんある。だが、それよりいつでも仲間が周りにいたこと、話を聞いて、助言してくれ、支えてくれたこと、その瞬間の方が強く残っている。

今、改めて考えれば、あんなに悩み、抱え込む必要がなかったのである。結果が何だったとしても私だけが背負うものではない。みんなで背負うものだったのだ。でも、リーダーとしてあれだけ悩んだことは、私の成長につながった。そして、幸せだったことにも気付かされたのだ。仲間のために悩んだのは、大切な仲間がたくさんいたからである。そして、支えてもらえる嬉しさ。すべてが良い思い出だ。

今、私は「西関東大会」に向かっている。私が一年のときから夢見ていた大舞台。この仲間と演奏できる幸せを胸いっぱい感じている。

このような経験を経て、リーダーのあり方がはっきりと分かった。それは、仲間を信じ、愛することだ。